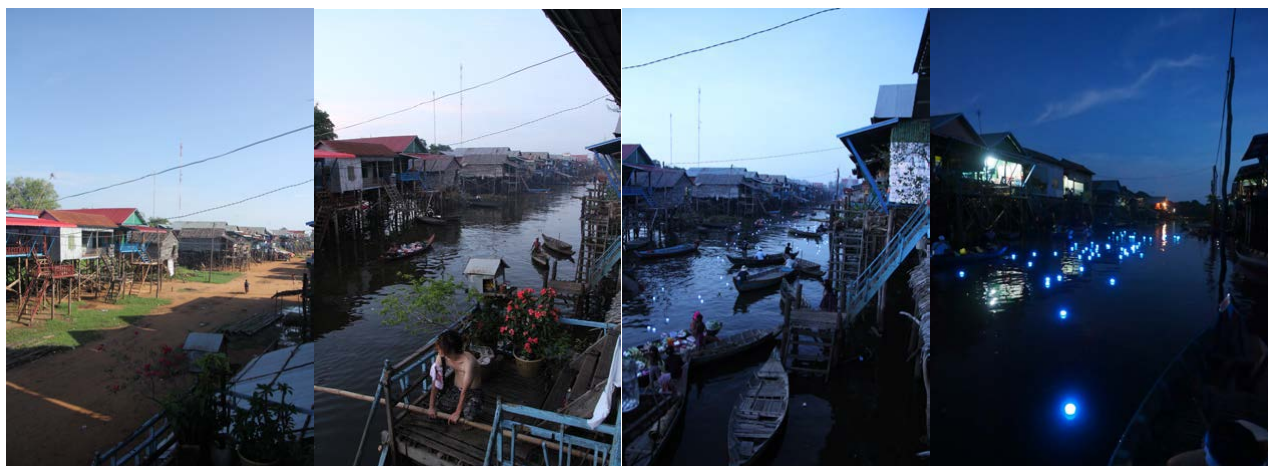




いのり星により暮らしの一部である水景そして空間が浮かび上がってくる。
(詳細は 4 ページ以降をご参照ください。)

【この活動の概要】

主な活動	海外における調査研究
実施時期	2005 年 4 月から
参加者数	2005: (渇水期) 6 名 / (浸水期) 10 名、2006: 14 名 / 14 名、等で延べ 150 人ほど
協力者	山田 脩二(写真家、瓦師) 丸茂 弘幸(元関西大学環境都市工学部教授) 岡 絵理子(関西大学環境都市工学部教授)

【カンボンブロック村の概要】

カンボジアの中央にトンレサップ湖という東南アジア最大の湖があり、水域面積が大きく変動することから「伸縮する湖」として知られている。浸水期(秋)の水域面積は、渇水期(春)の水域面積の3倍以上にもなり、水位も8m以上も上昇する。カンボンブロック村は、渇水期には陸地、浸水期には冠水して水面となる浸水域に立地する集落。そのため、渇水期には高床式住居が空中高く建ちならぶ集落が、浸水期には水上集落へと姿を変えこの自然環境と調和する。また、漁期にあたる渇水期には、漁業のため、水面を求め集落から南へ2kmの湖岸近くの浅水面上仮設住居を建て移住する。世界でも類を見ない独特な集住環境を持つ集落で、自然環境との高い応答性は極めて簡素な技術に裏付けされており、近代科学が見過ごしている視点を内包させている。

【先生に直接聞いてみました】

Q 始められた経緯は？

A 私は2004年春に本学に赴任しまして、「集落」を建築・都市デザインの原点と捉え学生に指導を始めました。その年の秋、ホーチミンに行く私と現地で合流する予定の学生(M1、B4の2名)が、研究室にあった私の蔵書の中から1枚の気に入った水上集落の写真を持ってカンボジアに立ち寄り、集落を探し出しました。水上集落は、水が引けば高床の地上の集落になるというものです。彼らの修士論文の対象とするために、本集落の実測調査を始めることにしたのがきっかけです。

Q 具体的な活動内容は？

A 2005 年度から 2006 年度に、渇水期と浸水期ごとに異なる全長 1,3km に及ぶ集落の全体の内外の実測図を完成させました。これにより

- ①渇水期と浸水期で定住住居が変化して対応する。
- ②渇水期に、集落のうちの約 50～100 戸（水位の上昇により異なる）の住居が、漁業（捕獲、養殖）のために、近傍のトンレサップ湖の浅水面上に仮設住居を建設し、季節移住する。
- ③季節移住住居は持ち運びやすい材料、建設・解体しやすい技術等、定住住居における自然応答技術との関連性が大きい。
- ④2005 年の渇水期の調査後に火災が発生したが、驚くべき速さで現地での早期復旧が成し遂げられ、その持続的再生は、季節移住仮設住居に関する技術に負うところが極めて大きい。

等が明らかになりました。2007 年度には、季節移住仮設集落の実測図を完成させ、仮設住居の構成と技術の解明をほぼ終了させました。

Q この研究の意義は？

A 本研究は、日常・非日常の変化に対応する持続的なシステムの総体が、「住居のディテール、システム」という小さな技術（及びそれらの継承）に起因しているという視点であり、その上で、公性、公共性、私性を秩序付ける集住環境の構成原理を解明するところに本研究の特色があります。建築計画と都市計画が分けて考えられ、それぞれが、大きな技術で全体を構築しようという視点の強い現代において、独創的な視点です。次代の持続的集住環境の形成、継承のためには、こういった「文化的ストック」の視点が重視、再認識されねばならないと考えられ、そこに本研究の社会的意義もあります。

カンボジアの集落に関する研究は、もともと空白の領域であったことに加え、内戦が長く続き、文化人の虐殺等の文化破壊の後、ほとんど手がつけられていない状況にあります。「東アジア漂海民の家船居住と陸地定住化に関する比較研究」2001～2003 年度・科学研究費補助金基盤研究(C2)報告書の中に、「第 8 章 トンレサップ湖の水上居住一家船・筏住居・高床住居」として、水面を浮遊する家船と筏住居とあわせた紹介が見られる程度で、トンレサップ湖の浸水域内における定住集落を扱った総合的な研究は、研究代表者等が 2005 年度より行っているものが初めての研究であり、「APSARA(アンコール及びシェムリアップ地域保護管理局)」からも高い評価と研究の継続への要請を受けています。

Q 同行した学生の反応は？

A 4 ページ以降の資料に書かれているとおり、この研究プロジェクトは学生により継続して行われています。このことが学生の何よりの反応と考えています。また、卒業生もいまだに継続的に現地を訪れています。

Q 費用は？

A 次のような学内外の研究助成制度を活用しました。以後は、各自自費で行っています。

大林都市研究振興財団研究助成(2008 年度、1,500,000 円)

関西大学学術研究助成共同研究(2008 年度、1,500,000 円)

ユニオン造形文化財団研究助成(2007 年度、1,500,000 円)

関西大学重点領域研究助成(2006 年度、6,000,000 円)

※いずれも江川直樹／研究代表者

Q 今後の展開は？

調査開始時には集落は観光客などいない漁村でしたが、近年、集落の観光地化が進み、それに伴って集



KANSAI UNIVERSITY

落の構造の変化を見守ることが課題となっています。現在では、調査対象というよりは、入れ替わる学生たちにとって、研究室の継続フィールドとしての役割を果たしています。

【参考文献・URL】

- ・『両棲集落 カンボジア・カンポンブロック村』、横山大樹、山田脩二、発行：旅とロック社（12.2015）
- ・『美しい両棲集落 カンポンブロック村の実測調査から』共著、編著：江川直樹、岡絵理子、関西大学建築環境デザイン研究室、全 70 頁、（2010.06.30）
- ・「『両棲集落 実測図×山田脩二の写真』展 カンボジア・カンポンブロック村ー自然のサイクルと調和した集住のカタチー」、関西大学江川研究室、江川直樹、岡絵理子、横山大樹、豊岡範光、東京新宿コニカミノルタプラザギャラリー（2008.4.29～5.19）
- ・「トンレサップ湖の季節移住仮設集落ーカンボジア・カンポンブロック村 実測プロジェクトからー」共著、江川直樹、横山大樹、豊岡範光、『ディテール』176、2008 年春季号、彰国社（3.2008）
- ・「カンボジア・トンレサップ湖の美しい両棲集落」、江川直樹、家とまちなみ 56 号、（財）住宅生産振興財団、28-29（9.2007）
- ・「カンボジア・カンポンブロック村調査を通して見えてきた住宅とマチの関係」、江川直樹、関西大学江川研究室、『新建築住宅特集』2007-08、新建築社、150-155（8.2007）
- ・「カンボジア両棲集落における近年の風景変化とその要因に関する研究」共著、小野敦、江川直樹、岡絵理子、日本建築学会近畿支部研究報告集、p285-288（2009.6）
- ・「トンレサップ湖浸水域集落の住居の素材と暮らしの関係について」＜査読有＞共著、岡絵理子、江川直樹、環境情報科学論文集第 21 号、p607-612（11.2007）
- ・「カンボジア・カンポンブロック村の空間と生活（その 1）ー渇水期における帯状広場の空間特性」共著、木村昇平、横山大樹、豊岡範光、江川直樹、丸茂弘幸、岡絵理子、日本建築学会近畿支部研究報告集、p377-380（2007）
- ・「カンボジア・カンポンブロック村の空間と生活（その 2）ー浸水期、渇水期における住居と生活の変化」共著、小寺正洋、横山大樹、豊岡範光、江川直樹、丸茂弘幸、岡絵理子、日本建築学会近畿支部研究報告集、p381-384（2007）
- ・「カンボジア・カンポンブロック村の空間と生活（その 3）ー浸水期、渇水期における近隣空間の変化」共著、木下晃輔、横山大樹、豊岡範光、江川直樹、丸茂弘幸、岡絵理子、日本建築学会近畿支部研究報告集、p385-388（2007）
- ・「カンボジア・カンポンブロック村の空間と生活（その 4）ーある4軒を事例にした近代化における考察」共著、平田千洋、横山大樹、豊岡範光、江川直樹、丸茂弘幸、岡絵理子、日本建築学会近畿支部研究報告集、p389-392（2007）
- ・「実測図×山田脩二の写真展ー関西大学 カンボジア・トンレサップ湖カンポンブロック村調査報告ー」、横山大樹、豊岡範光、江川直樹、丸茂弘幸、岡絵理子、新関西大学会館南館ギャラリー（4.2007）
- ・「カンボジアの美しい両棲集落、南仏の美しい小集落、そして日本の集まって住む環境のデザイン」、江川直樹、交通まちづくり学研究会、大阪駅前第2ビル4階キャンパスポート大阪会議室（2013.02.08）
- ・「場所の声を聞くーカンボジアの美しい両棲集落」、江川直樹、アジェンダ 21 吹田、大阪学院大学 2号館地下1階O2教室（2012.07.21）
- ・「カンボジアの美しい両棲集落」、江川直樹、水谷ゼミナール、神戸元町まちづくり会館（2010.8.27）
- ・「Design of place where people liveーattention to the voice in the placeー」、「The Space and Life in Kampong Phluk,Cambodia」、Naoki Egawa、at Gadjah Mada University（2010.07.29）

発行：関西大学国際部 <http://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/>



KANSAI UNIVERSITY

いのり星®放流 in カンポンブロック村

天の川プロジェクト × 建築環境デザイン研究室

渇水期調査旅行：2014.6.30~2014.7.5
浸水期調査旅行：2014.11.2~2014.11.5
放流日：2014.11.4



■ 変化するカンポンブロック村

建築環境デザイン研究室では、2005 年から集落を訪れ、実際に集落に住み込み、集落全体の住戸配置と、寺院、学校、住戸の内部を実測し、図面化。2008 年には東京新宿のコンカミノルタプラザで「両棲集落 実測図 × 山田脩二の写真」展を行った。現在も毎年学生が集落を訪れ、刻々と変わり続ける集落の姿を記録し続けている。

2014 年度も 7 月と 11 月に村を訪れ、その変化を確認した。村には電柱が立ち並び、(24 時間電気が使える訳ではないが)夜も多少明るくなっていた。また季節移住仮設住居は、湖までの川が整備されたことにより、その必要性が無くなり、季節移住という文化そのものが無くなってしまったという。

カンポンブロック村への調査旅行も始まって 10 年になるうとしている。変化し続ける村の姿は、関わってきたそしてこれから関わるであろう人たちの心にどのように映るのだろうか。

※カンポンブロック村については 2013 年版「協働する学生のチカラ」に詳しい



湖に季節移住仮設住居の姿はない



集落内には電線が走っている



空中集落の姿



今年は水量が少なく、不思議な風景



宿泊は集落内の住居

■ 天の川プロジェクト® といのり星®

(天の川プロジェクト <http://amanogawa-project.com/>)



中之島「平成天の川伝説 2014」の様子

一悠久の時を超え、様々な土地に恵みを与え続けてきた水の流れ。それは、流域で暮らす人と人、地域と地域を結びつける大切な役割を果たしてきました。本プロジェクトは、そんな水の流れがもたらす“えにし(縁)”をひもとき、そこに沢山の人が想いをはせる機会を創り出そうというプロジェクトです。(天の川プロジェクト HP より)

今回のコラボレーションは、天の川プロジェクト代表の原野芳弘氏と江川直樹教授の発案である。

いのり星® は、着水すると視認性の高い青い光を発するボールである。「水景」を可視化することで水の流れが想起させる無限の時間に思いを馳せ、水辺の再評価を図ろうという試みである。日本では夜景とのコラボレーションが美しいが、今回は、無電化地域であるカンポンブロック村で、その生活の一部である水景を浮かび上がらせる。



■ 7 月から準備作業

7 月の調査旅行の際に、村長に「いのり星を浸水期の村で浮かべたい」と話し、一応の許可を得ることができた。帰国後は、毎年ガイドをお願いしているスロースさんを通して、関係各所への調整を進めてもらった。一方、日本では、原野芳弘氏とともに放流計画を進め、100 個のいのり星を放流することになり、原野氏の指導のもと、いのり星の点検作業等準備を進めた。11 月の放流の際には、現地でも放流のリハーサルや動画撮影の細かな調整を行っている。



いのり星により暮らしの一部である水景そして空間が浮かび上がってくる。

■ 暗闇に浮かぶいのり星

流れのない暗闇の村に浮かぶいのり星はまさに夜空に輝く「星」。純粋にいのり星を眺められるのは村ならではの体験であった。視認性の高い青い光に村の人たちも興味津々、家からたくさんの人が出てきていたようである。家々が向き合っていて、真ん中に流れるいのり星をみんなで眺めているという空間が印象的であった。いのり星も大変綺麗であったが、今回の大きな成果は、村の人たちが手伝ってくれた事である。言葉は通じないが、いのり星が流れをはずれたら戻してくれたり、明かりがついてないものがあれば、教えてくれたり。「オーケン！（ありがとう）」と言えば笑顔で返してくれる。

学生と村人の新しい交流のカタチ—今後も継続的にいのり星を放流するには様々な課題があるが、この村なら大丈夫と思える何かがあるように感じた。



ほとんど灯りのない村に浮かぶいのり星はまさに「星」であった。





呼吸する集落

カンボジア・カンボンブロック村における美しい両棲集落の実測調査

—カンボジア・トンレサップ湖カンボンブロック村—

カンボジアのほぼ中央に位置しているトンレサップ湖は、水域面積が季節とともに大きく変わることから『伸縮する湖』として知られている。水域面積は渇水期(2月7月)の3000km²(琵琶湖の3倍)が浸水期(8月1月)には3倍以上に拡大し、10000km²になり、水位の上昇は8m以上にも及ぶ。トンレサップ湖には、渇水期には陸地であるが、浸水期には水面となる浸水域がある。

カンボンブロック村は、アンコールワットへの観光拠点として知られるシェムリアップより南東へ21kmに位置し、トンレサップ湖の浸水域に立地する。そのため、渇水期には高床式住居が空中高く建ち並ぶ集落が、浸水域には住居の床下まで水が達し、水上で生活をする水上集落へと様相を変える。自然環境の変化に呼吸を合わせて人々が暮らす集落である。

カンボンブロック村では3042人が441戸の高床式住居で暮らし、世帯の9割がトンレサップ湖での漁業を生業としている。向かい合う二列の住居が南北に1.2kmの直線をなし建ち並ぶ構成が、際立って美しい。住居は、縄で縛られた木造軸組で、壁や屋根には主に「トタン」や「ヤシ」の軽い素材が用いられている。床板は固定されておらず可動式である。二列に並ぶ明快な構成が簡単な技術の集積に支えられた「柔らかさ」を内包した構造となっていることが、自然環境の変化に応じて住居の空間構成を変えて暮らすことを可能にしている。

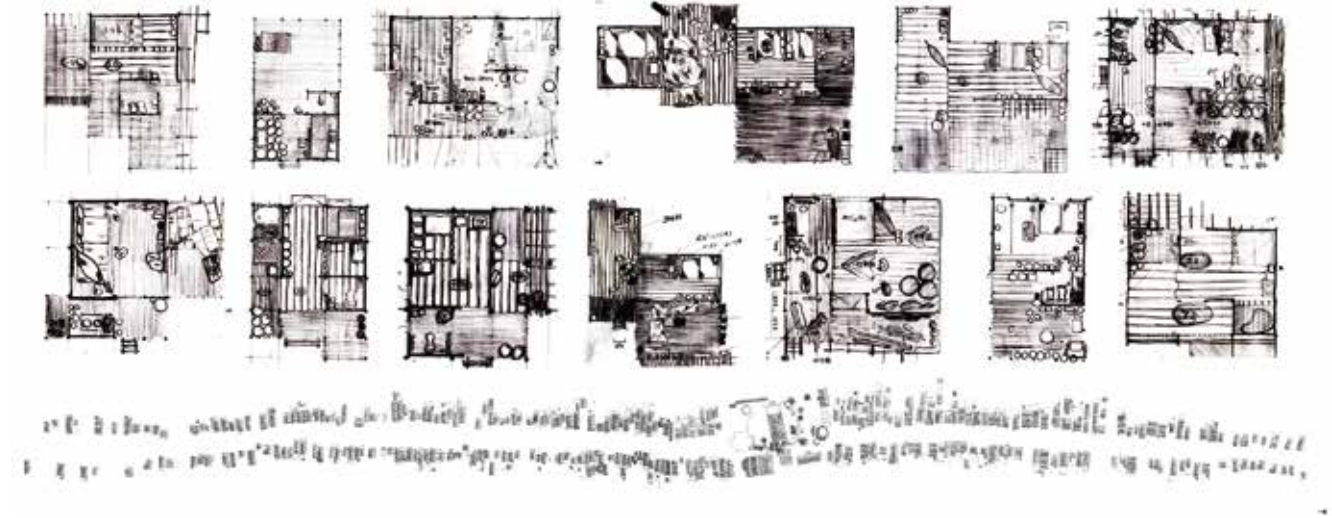
—調査概要—

2005年から2012年にわたって関西大学学生を始め、他大学の学生、専門家の方々を含めた述べ77人が集落に訪れ、実際に集落に住み込み、集落全体の住戸配置と、寺院、学校、住戸の内部を実測し図面化した。カンボンブロック村での調査を毎年(渇水期と浸水期 年2回)継続的に行うことで集落が時を刻む姿を記録し続けている。



2007

季節移住仮説集落の実測を行い各住戸の平面図を描きました。また、初年度に実測した住戸の位置関係をより詳細に把握するため全体の配置図を描き直しました。



2008

東京新宿のコニカミノルタプラザで「両棲集落 実測図 × 山田脩二の写真」展を行いました。調査に同行してくださった山田脩二さんの素晴らしい写真と共に、これまで学生が協同して作成した実測図の全てを公開展示し、多くの反響をいただきました。



2009

調査開始から4年目。一通りの実測を終えていたこの年は、これまでの「集落の把握」から「集落の変遷」について調査を行う事にしました。建物の建て替えや新しく建った建物、無くなってしまった建物などを一戸ずつ調べていきました。また、我々が毎年調査に訪れているためカンボンブロックの住民も慣れてきたのか、調査をしている様子を近寄って興味深そうに眺めていました。



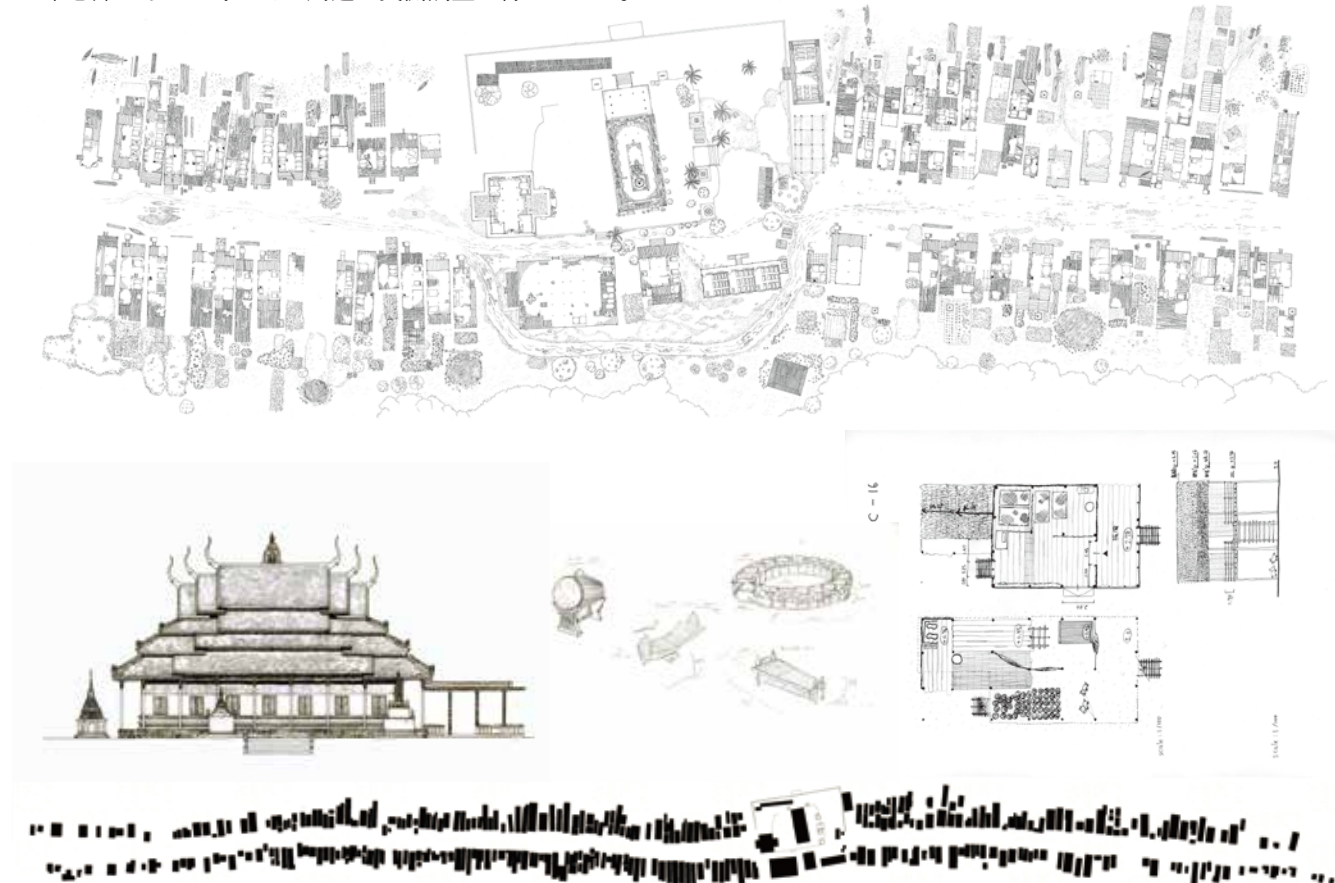
2004

偶然見つけた写真を手掛かりにカンボンブロック村を訪れることになりました。



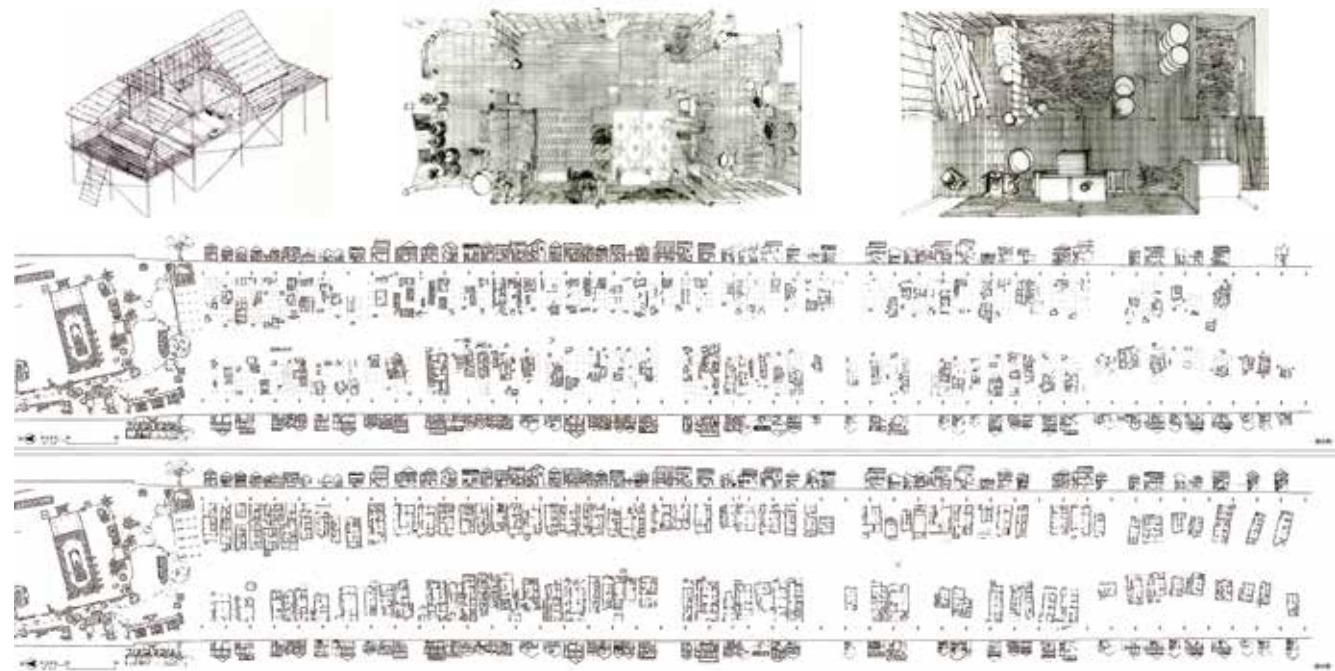
2005

最初は何も分からないまま初めて村を訪れました。調査初年度は集落全体の構成を把握するため、各住戸の配置と集落の中心部にあるお寺とその周辺の実測調査を行いました。



2006

調査2年目は带状広場を形作る建物の立面や各住戸の細部について実測を行いました。まだ日差しが弱い早朝に実測調査に行き、強い日差しが照りつける日中は図面を描き、日が傾きだす夕方にまた実測調査へ向かう日々が続きました。



2010

これまで住戸の配置や立面など集落全体を捉える実測を行ってきたのに対し、住戸の表側に張り出している前デッキの使われ方の調査や住戸の裏側にある給水管の調査を行うなど、調査はより細かな部分について行うようになりました。過去の実測データを片手に、手分けして全住戸について調査を行いました。



2011

1200mにも及ぶ集落の微妙な変化を把握するため各住戸の連続立面を写真におさめました。住民の温かい了承を得て撮った一戸一戸の写真は時代を表現し、記録として残し続けていくことでゆっくりと時を刻む集落の風景を見守っていきます。



2012

調査7年目のカンボンブロック村。各住戸の脇には将来電信柱の役割を果たす背の高い木が立ち並んでいました。また带状広場に顔を出すお店が増えていたり、集落からトンレサップ湖を結ぶ空中通路が建設されていたりと、刻一刻と変化しているカンボンブロック村を肌で感じました。

